



特別展：仏像でみる伊豆の平安時代

会期：2024年10月5日(土)―2025年1月13日(月・祝)

場所：上原美術館 仏教館

最近、紫式部や清少納言が生きた、平安時代(10世紀後半～11世紀前半)に注目が集まっています。紫式部の『源氏物語』、清少納言の『枕草子』は有名ですが、この時代に朝廷で権勢をふるった藤原道長も日記『御堂関白記』を残しており、当時の貴族たちの生活や考え方を知ることができます。その一方で、同じ時代の地方については文献資料がほとんど残っておらず、上原美術館がある伊豆についても、その歴史や人々の営みはあまり明らかになっていません。しかし、伊豆には、平安時代の人々の心のよりどころとなった仏像が意外に多く伝えられています。本展は、文献ではうかがうことが難しい、伊豆の平安時代を、仏像を通じて考え、感じてみようとする展示会です。

観音寺の薬師如来像、向陽寺の阿弥陀如来像、善光庵の十一面観音像、法雲寺の如意輪観音像、金龍院の不動明王像は、10世紀から11世紀前半の像と考えられており、紫式部や藤原道長が生きた時代に造像された仏像。その後、千年近い年月、信仰されてきた貴重な仏像です。通常非公開の仏像、数十年に一度開帳される仏像も展示いたします。この機会に是非ご覧ください。

## 01.失われた平安仏の記憶

### 天部像残欠 (てんぶぞうざんけつ)

平安時代 (10～11世紀)

河津平安の仏像展示館 河津町指定文化財

河津町谷津の南禅寺に伝えられた彫像断片。重ね着をした袖から、梵天や帝釈天など位の高い天部、あるいは吉祥天など女神像の右腕と考えられます。向かって右側面の丸穴は、体幹部に取り付けるための丸柄の跡。正面、袖の内側には丸い腕があらわされ、やはり丸い穴があることから細い丸柄で手首先を取り付けていたようです。南禅寺には26体の平安仏がありますが、本断片はいずれの像とも合いません。失われた平安仏の一部です。



## 02.重要文化財のカケラ

### 南禅寺諸像断片 (なぜんじしよぞうだんぺん)

平安時代(10～12世紀)

河津平安の仏像展示館 河津町指定文化財

河津町谷津地区の南禅寺には26体の彫像群が伝来、令和6年8月、国指定重要文化財になりました。展示中の彫像の断片は仏像群とともに南禅寺に伝来したもので、



平安時代のものです。

平安の断片の総数は23点で、そのほとんどが現存するどの像にも取り付けることができず、千年を超える歳月を経て失われた像の一部と考えられます。断片とはいえ、南禅寺にかつて存在した仏像神像群の全体像を復元し、その造像事情や歴史を考える上で、極めて貴重な文化財です。

### 03. 伝説の古刹に唯一残った平安仏

#### 天部像（てんぶぞう）

平安時代（12世紀）一木造り・現状玉眼・彩色

南伊豆町岩殿・岩殿寺

髪を結び上げた髻から両足まで一材で造る像。背板、両腕、足先を別に造りますが、両腕、足先は失われました。頭部は一度胴体から割り離す割首で、目に玉眼を入れていますが、玉眼は後世補ったものです。

髻の形、穏やかな姿などから平安後期の像と考えられます。伊豆の地誌『豆州志稿』は岩殿寺を「昔は大寺院であった」と記し、鎌倉時代の十二神将像が現存しますが、豊臣秀吉の小田原攻めの際に焼かれました。本像は岩殿寺の歴史が平安にさかのぼる可能性を示しています。



### 04. 世にも珍しい仏像を持つ仏像？

#### 毘沙門天像（びしゃもんてんぞう）

平安時代(12世紀) 一木造り 彫眼 彩色

下田市吉佐美地区

かつて吉佐美地区にあった毘沙門堂の本尊像。この堂が廃絶した後は地区の集会所に移され、室町時代の不動明王とともに信仰されてきました。両手首先以外の大部分を一材で造り、背面から内部を削り抜いたうえ、背板を当てています。造形は素朴ですが、堅実な造形や構造から、平安時代後期の像と考えられます。

左手にのせる不動明王像が目を引きますが、本来は宝塔を持つ姿だったでしょう。当初からの姿ではないものの、平安仏に後世の信仰が重ねられて生まれた、不思議で魅力的な造形です。



### 05. 新たに見出された平安時代の記憶

#### 如来像断片（によらいぞうだんぺん）

平安時代 木造・素地

伊豆の国市長岡・宗徳寺

宗徳寺から令和四年に見出された六体の平安仏と仏像断片十点のうちの一部。展示するのは半丈六（像高240cm前後）の大きさの如来坐像の脚部と、右腕の一部です。

伊豆の地誌『豆州志稿』は、宗徳寺の前身は仙光寺という名の寺



で、仙光寺の仏像は「すこぶる古仏」であると記していますが、展示中の平安仏断片はこれに該当すると思われ  
ます。伊豆の国市に鎌倉期の優れた像が多いことは知られていますが、従来、平安仏の情報はほとんどありませ  
んでした。しかし近年、当地から平安仏の発見が続いています。

## 06. 神聖な霊木を用いて刻んだ神のすがた

### 僧形像（そうぎょうぞう）

平安時代 一木造り・彫眼・素地

伊豆の国市長岡・宗徳寺

宗徳寺に伝わる僧の姿の像。針葉樹の一材で像のほぼ全容を造る一木造りで、朽ち  
て像の下部を失っています。

本像で特異なのは、表面に多くの節を持つ材を用いる点です。通常、造像には傷や  
節のない木目の通った質の良い材を選ぶのが普通ですが、平安時代の神像や仏像  
には、表面に節があり、内部が朽ちて空洞になった材を用いる例があり、特別な  
霊木を用いたと考えられます。本像もその例で、本像は特別な霊力を持つ僧、ある  
いは僧の姿をとる神の像と考えられます。



## 07. 伝説の菩薩像、降臨

### 地藏菩薩像（じぞうぼさつぞう）

平安時代後期(11世紀) 一木造り 彫眼 漆箔

下田市横川・太梅寺

下田市の古刹、太梅寺の本尊像。

両肩以下の両腕・足先、肉身に塗られた金色は後補、面部や背面も彫り直されていますが、  
腹部以下の衣文は古様で、平安時代の像と考えられます。寺の伝承によると、寛徳二年  
(1045)、当地にきた桓舜(978~1057)が当地の稲荷神の夢のお告げ念持仏の地藏を本  
尊として寺を開創したのが太梅寺の始まりとされています。桓舜は藤原道長に重んじられた天  
台宗の僧で、現在の熱海の伊豆山に来たことが文献から知られており、これらの史実は本  
像の年代と一致しますが、伝承が本当に正しいものなのかどうかは今後の研究が必要です。



## 08. 失われた平安仏の記憶を伝える遺物

### 台座・光背（だいざこうはい）

平安時代(12世紀) 木造 漆箔

南伊豆町岩殿・岩殿寺

岩殿寺の秘仏本尊の台座と光背。現本尊は像高 60 cmの薬師如来坐像で、立つと四尺前後(約 120 cm)となる中世以降の像ですが、この台座光背は、光背の後頭部にある頭光の位置から見て、ひと回り小さい三尺(立像で 90 cm前後、坐像は 50 cm弱)の坐像のものです。

台座の下から三段目にあたる上框に記す江戸の修理墨書に、本尊を文永十年(1273)に造像したと読める一文がありますが、細部の意匠は平安後期の作例と共通し、失われた平安仏の台座光背であった可能性が高いようです。光背背面に補強のための板を当てていますが、当初は透かし彫りでした。



## 09. 60年に1度開帳される嚴重な秘仏本尊

### 薬師如来及び日光・月光菩薩像（やくしによらいおよびにっこうがっこうぼさつぞう）

平安時代(12世紀) 木造・彫眼・彩色

松崎町岩科南側・指川区 松崎町指定文化財

松崎町岩科地区には、奈良時代の行基が作ったという伝説を持つ薬師像を本尊とする東福寺、真福寺、不老寺はあり、岩科三薬師と呼ばれていました。本像は真福寺本尊と伝える像です。薬師像は頭部と胴体の主要部分を前後二材を寄せて作る寄木造りで、ていねいに内部を削り抜いています。いっぽう脇侍は一木造りです。このように三体は構造が違いますが、いずれも頭部を一度割り放し、細部

を仕上げたうえで胴体に取り付ける割首としています。修理のペンキが像容を損ねるものの、穏和で整った姿から平安後期の像と考えられます。伊豆西海岸を代表する貴重な平安仏です。



## 10. 伊豆西海岸を代表する平安の毘沙門天像

### 毘沙門天像（びしゃもんてんぞう）

平安時代(12世紀) 木造・彫眼・彩色

松崎町岩科南側・指川区 松崎町指定文化財

9の像とともに、指川地区の薬師堂に伝えられた像。甲冑をつけて邪鬼を踏み、右手に突き刺す武器の三叉戟、左手には宝塔を持っていたと考えられ、毘沙門天像とわかります。頭上の髻から両足までの主要部分を一材で造った上、前後に割って内部を削り抜く一木割刳造りで、背面の腰以下、後方にたなびく裾の裾までを別に造って寄せています。頭部は割首とします。

本尊と同じ平安後期の像と考えられますが、面貌などが16の不動明王と似ており、同じ仏師の作の可能性がります



## 11. 紫式部と同時代？三嶋大神の御神体としての仏像

### 薬師如来像（やくしによらいぞう）

平安時代(11世紀) 木造・玉眼・漆箔

南伊豆町手石・青龍寺 南伊豆町指定文化財

頭と胴体の中心部分を広葉樹の一材でつくる一木造りの像。両手、脚部、表面の金箔、玉眼は江戸時代の修理で補ったもの。丸太材の曲線をそのまま用いて胴体を造っており、これは10世紀後半から11世紀に見られる技法です。本像はかつて、手石地区の月間神社境内にあった東光寺の本尊でした。月間神社は10世紀に朝廷が全国各地の由緒ある神を記した、延喜式神名帳に見られる「竹麻神社三座」にあたり、祭神は三嶋大神です。古くこの神の本体は薬師如来とされたため、本像は神の本体としての仏像である、本地仏と考えられます。



## 12. 山中の洞穴にまつられた秘仏本尊

### 観音菩薩像（かんのんぼさつぞう）

平安時代後期(12世紀) 一木造り 彫眼 彩色

南伊豆町下賀茂・慈雲寺 南伊豆町指定文化財

古く慈雲寺背後、山中の岩窟にあった岩谷寺の本尊像。伊豆横道三十三所観音霊場の二十七番札所の本尊として、六十年に一度開帳される秘仏でした。

修理による厚い古色彩色におおわれ、当初の姿をうかがい難い状態ですが、右手首先、左手肘先、腕から左右に垂れ下がる天衣の先端、両足先以外の像のほぼ全容を一材で造る一木造り。太く堅実な造形、膝前に二重に天衣を表す表現など、各所に古様が認められ、平安後期の像です。地方色から在地の作者による像と考えられます。



## 13. 昔は有名だった？地名に名を遺す平安仏

### 地藏菩薩像（じぞうぼさつぞう）

平安時代後期(12世紀) 一木造り 彫眼 彩色

南伊豆町下賀茂・慈雲寺 南伊豆町指定文化財

南伊豆町中心部を流れる青野川沿い、慈雲寺の地藏菩薩像。修理で厚い古色彩色と金箔におおわれ、両手首先、両足を補うほか、像下端や面部を彫り直しますが、力強い造形から古像と分かります。一木造りの構造は古風ながら、右腕内側の浅い衣文は時代の下降を示し、頭部が過大で、前傾する体勢も平安後期の像に見られます。造形に地方色が顕著で、古代伊豆南部の文化や彫刻史を考える上で貴重な作例です。慈雲寺周辺には「地藏堂」の地名が残り、古く著名な像であった可能性があります。



#### 14. 都生まれと見まがう姿の奥伊豆の秘仏

### 薬師如来像（やくしによらいぞう）

平安時代(12世紀) <sup>いちぼくわりはぎ</sup>一木割矧造り 彫眼 古色

南伊豆町<sup>かみがも</sup>上賀茂・<sup>さいふくじ</sup>最福寺

南伊豆町、毛倉野地区にあった<sup>とうこうじ</sup>東光寺の秘仏本尊。東光寺廃絶後、<sup>さいふくじ</sup>最福寺に移されたとい  
います。頭体をヒノキの一材で造った上、前後に割って内部を<sup>く</sup>削り抜く<sup>いちぼくわりはぎづく</sup>一木割矧造りで、  
両手首先、両足先、表面の彩色は後補です。温和な丸顔、<sup>りゅうらい</sup>流麗な衣文、動きの少ない穏や  
かな造形から平安後期の像と考えられます。

本像を伝えた毛倉野地区は、奥伊豆にあってもとりわけ山深い地。伊豆では、不便な土地  
から、洗練された平安時代の仏像が見出されることがありますが、その理由は良くわかつ  
ていません。



#### 15. 令和4年に見出された三島市最古の仏像

### 薬師如来像・十一面観音像・如来形像

（やくしによらいぞう・じゅういちめんかんのんぞう・によらいぎょうぞう）

平安時代(11世紀) 一木造り 彫眼 漆箔

三島市<sup>やすひさ</sup>安久・<sup>ちようふくじ</sup>長福寺

<sup>ちようふくじ</sup>長福寺本尊の薬師如来像とその<sup>りょうわき</sup>両脇に配される像。いずれも一木  
造りで、薬師像は両手首先、他の二像は<sup>りょうひじき</sup>両肘先と手首先を別に造つ  
て寄せています。十一面観音の頭上面は朽ちて棒状になっていた  
ものを成形。如来形像は盛り上がる頭髪に<sup>らほつ</sup>螺髪をあらわす<sup>いぎよう</sup>異形です  
が、頭部は複数の部材からなり、当初の姿はうかがい難い状態です。

<sup>あまぎ</sup>長福寺は<sup>かのがわ</sup>天城を源流とする<sup>だいぼがわ</sup>狩野川と<sup>か</sup>大場川の合流点に近く、近隣に

古代の役所跡と倉庫群と思われる<sup>はこねだ</sup>箱根田遺跡があります。この遺跡からは仏の顔を描いた<sup>ぼくしよ</sup>墨書土器が出土し、本  
像はこの遺跡と関わる像と考えられます。薬師像は本展初公開です。



#### 16. 60年に一度本開帳される嚴重な秘仏

### 不動明王及び二童子像（ふどうみょうおうおよびにどうじぞう）

平安時代（12世紀）一木造り・彫眼・古色

<sup>まつとう</sup>松尾不動堂（<sup>まつとう</sup>松崎町松尾区）

不動明王と二童子からなる三尊像。二童子のうち、<sup>こんがらどうじ</sup>矧羯羅童子は善の童子、<sup>せいたかどうじ</sup>制吒迦童子  
は私の強い悪の童子とされ、互いに一長一短を補い働きます。

不動明王は頭体をヒノキの一材でつくった後、前後に割って<sup>うちぐり</sup>内削りする<sup>いちぼくわりはぎづく</sup>一木割矧造り。  
古風な造形から平安後期の像と考えましたが、両足を一度体から割り離す<sup>わりあし</sup>割足や<sup>こしわき</sup>腰脇の  
衣の表現などは時代が下る特徴で、実際の制作年代は鎌倉時代に下る可能性があります。  
西伊豆を代表する不動明王像で、60年に一度本開帳される秘仏です。



#### 17. 滝に打たれる修行者の守護仏

## 不動明王像（ふどうみょうおうぞう）

10世紀後半 一木造・彫眼・古色

伊豆市大平・金龍院 静岡県指定有形文化財

かつて伊豆市大平の旭滝のかたわらにあった瀧源寺に伝来した像。滝行に臨む行者が信仰した仏像と考えられます。

頭体を一材でつくる一木造りで、両手両足を寄せています。腹前の板は補修の跡のようです。奥行きのある充実した体軀、鎬立つ衣文、古様な作風などから、紫式部や清少納言と同時代、10世紀後半の像と考えられます。平安貴族は、自らや一族の守護、安産、政敵排除、怨霊退散など様々なことを不動明王に祈りましたが、祈りを託された仏像は本像のような姿だったでしょう。



## 18. 平安女性の面影を伝える？美と幸運の女神

### 吉祥天像（きちじょうてんぞう）

平安時代(10世紀後半～11世紀) 一木造り・彫眼・素地

河津町縄地・地福院

下田市白浜を見下ろす景勝地、尾ヶ崎ウイングの位置にあった薬師堂の本尊。60年一度開帳の嚴重な秘仏でした。像のほとんどを広葉樹材でつくる一木造りで、別に造った当初の両手首先と両沓先を失っています。全体的に朽ち、特に背面は原型を留めず、像下部も大きく補修されていますが、正面の保存状態は比較的良く、豊麗な面貌と、華麗な着衣を見ることができます。

本像は「源氏物語」が著された頃の像と考えられます。物語に登場する平安のヒロインの面影を思わせる女神像です。



## 19. 圧倒的存在感！伊豆を代表する十一面観音像

### 十一面観音像（じゅういちめんかんのんぞう）

平安時代(10世紀) 一木造り・彫眼

河津町峰地区・善光庵 静岡県指定有形文化財

ほぼ全容をカヤの巨木で造る一木造りの像。右手首先、左肘先を別に造って寄せています。また地付きから15cmの高さまで補修しています。広い肩幅、太い体軀など圧倒的な量感を感じさせる像。衣文の先端を筋状に鎬立てて彫る表現などと合わせ、十世紀前半の像と考えられます。古く、善光庵が火災で燃えた後、同じ河津町内の南禅寺から迎えた仏像と伝えられ、十七年に一度開帳される秘仏。頭の鉢に並ぶ頭上面に目鼻をあらわさないのは古い十一面観音像にみられる表現です。伊豆を代表する十一面観音像の優品です。



20. 実は女性なのですが…。東日本最古？の如意輪観音

### 如意輪観音像（によいりんかんのんぞう）

平安時代(10世紀) 一木造り・彫眼・素地・墨

下田市須原・法雲寺

伊豆横道観音霊場十二番札所本尊として60年一度本開帳される嚴重な秘仏。

右膝を立て、一面六臂で右手を頬に当てる姿は如意輪観音の特徴ですが、東日本では平安時代にさかのぼる本格的な如意輪観音像の報告がほとんどありません。針葉樹の一材で頭体をつくる一木造りで、腕と伏せた左足を寄せています。先端が筋状に鑄立つ衣文、左足の同心円状の衣文から10世紀の像でしょう。如意輪観音はもともとは女性のほとけですが、江戸後期以降、馬頭観音として信仰を集めたため髭が描かれてしまいました。



21. たっぷりとしたおなかは平安仏の証

### 薬師如来像（やくしによらいぞう）

平安時代(10世紀) 木造・彫眼・漆箔

下田市須崎・観音寺 下田市指定文化財

河津から迎えたといわれる仏像で、近年まで30年一度開帳の秘仏でした。構造は頭と胴体を一材でつくる一木造りで、両手や脚部を寄せますが、現在は江戸時代に補われたものに代わっています。表面の金箔、顔も修復されたものです。

たっぷりと量感に満ちた体、大波小波が交互に打ち寄せるような翻波式衣文が腹部に見られること、頭髪と肉髻の境が不明瞭で、ニット帽をかぶるように見えることから十世紀の像と考えられます。下田市内最古の仏像です。



22. むちゅっと愛らしいお顔の阿弥陀さま

### 阿弥陀如来像（あみだによらいぞう）

平安時代(10世紀後半) 一木造り 彫眼 漆箔

下田市宇土金・向陽寺

昭和58年、美術館正面の向陽寺から見出された仏像。ニット帽のように高く盛り上がる肉髻、両足左右に刻む同心円状の衣文、奥行きのある造形は古風。像の前面を、丸太の曲面をそのまま用いて造像する技法からも、10世紀後半にさかのぼる仏像と考えられます。目尻が長く切れ上がり、鼻と口が接するため、口を尖らすように見える顔も古風で、この面貌は19の十一面観音像と共通します。本像が造像されたころ、都では紫式部が「源氏物語」を、清少納言が「枕草子」を執筆していました。

